

高松最後の夜、凜子は夕食を終えると、自分の実家に電話をかけた。

めったに電話などしない娘に、両親は驚きの声をあげ、父は「大雨が降ったのは凜子のせいだな」と笑った。

受話器を耳にあてている凜子に、雨の音は聞こえなかったが、いま地元では横殴りの激しい雨が降っているのだという。

凜子は自分から電話をしたものの、実際に父や母が電話口に出ると、なにを話しているのかわからなかった。

貫太くんは元気か、とか、あら四国に来ているの、と聞く両親に凜子は、適当に相槌を打っている。両親の話題は、一か月前凜子のもとに送ったシイタケの話に変わり、先日あった法事の話に移る。延々と続くと思われた世間話を遮るように、凜子は、

「お母さん、わたし」

と叫ぶように言ってみる。

「なに？」

「わたし、もうすぐ結婚するとよ」

「知つとると。なにをいまさら」
母の元気そうな笑い声を聞くと、凜子はそつと受話器を置いた。

いま頃、両親は「さっきの電話はいつたいなんね？」と顔を見合わせ、不思議がつているにちがいない。当の本人ですら、いったいなにが言いたくて電話をしたのか、わからないのだから。

ただ、今回の旅が、凜子にふるさとで過ごした幼い頃を思い出させたことは間違いない。電話した理由などない。ただふるさとを思い出し、懐かしい声が聞きたくなっただけだ。

翌朝、ふたりが高松駅に着いたのは列車が発する直前だった。

快速と書かれた列車に急いで乗り込み、シートに腰をおろしたとたん、凜子は「あっ」と声をあげた。

ホテルのテーブルに、昨日買ったクローバーの鉢を置き忘れてきてしまったのだ。

「どうした？ なにかまだこの土地に心残りでも？」

貫太が余裕いっぱい笑顔を浮かべて聞いてきたとき、凜子は、彼は最初からすべてを知っていたにちがいないと悟った。この旅で凜子が訪ねた場所も、誰に会いに行こうとしていたのかも――。

「部屋に忘れ物をしたの。でももういい。わたしには必要のないものだから」

凜子は胸を張って言いきった。だって四つ葉は、これからふたりでさがしに行くんでしょ、という言葉は飲みこみながら。

ふたりで同じ窓の外を見た。

列車は瀬戸大橋の上を走っており、窓からはきらきらと光る群青色の海が見えた。

この四日間の旅の途中、貫太は、地元のひとに、香川のお勧めの観光スポットはどこかと聞いてまわっていた。

旅のガイドブックに載っているようなメジャーな場所を教えてくれるひともいれば、倉庫を改装して作ったカフェを勧める人もいた。

のぼっているのかくだっているのかわからない不思議な道路を「いっぺん行って見まい」と言っ

て、地図を描いてくれる人もいた。

そんななか、凜子が興味を持ったのが瀬戸の夕凧だった。

電車の中で出会ったハチマキを頭に巻いた初老の男性は、身乗り出して、ふたりにその美しさを熱心に話してくれた。

男性によると、瀬戸内海では、夏の夕刻にぴたりと風が止まる時間があるのだという。そのときの海の穏やかな様子といたら、「どうしようもないほどきれい」なのだそうだ。

部屋の中で過ごしているひとにとっては、地獄のような暑さではあるが、ひとたび海を眺めに外へ出てみると、それは言葉ではいい表せないほどに美しい風景だという。

「瀬戸の夕凧。機会があつたら、夏にぜひ見においで。波も風もぴたつと止まってなあ。そりやあんだ、すごいで」

その話を聞いたのは旅行二日目であつた。凜子は翌日佑介の実家を訪れることで頭がいつぱいだつたが、その説明は、男性のハチマキに描かれていた模様とセットで、よく覚えている。

また香川を訪れてもいいな、と思いながら凜子はひとり海を見る。向いに座った貫太は寝息を立てて気持ちよさそうに眠っている。

瀬戸の夕風か……。

今度、この土地を訪れるときには、いったいわたしはどんな気持ちでいるのだろう、と凜子は思った。

これからはひとりではなく、貫太とともにふたりで歩む日々がはじまる。

ときにわたしたちは、悩むだろう。迷うだろう。笑いあう日もあれば、口をきかない日もあるだろう。今回のようにどこかへ旅に出ることもあるだろうし、日本を脱出して、海外に行く機会だってあるかもしれない。

そして、いつの日もわたしたちは、地球のどこかで、しあわせや樂園をさがすのだろう。それらは、心のなかにしかないと知りながら、それでも最後の葉っぱを、四枚目の葉をさがし求めて、生きていくにちがいない。

岡山のちいさな駅に列車が止まった。

駅の掲示板上に貼ってあるサーカスのポスターが凧子の目にとまった。

凧子は列車の窓から、見るともなくそのポスターをぼんやりと眺めていた。そしてやっと思いついた。ずっと忘れていた高松のあの通りの名前を――。

さがし続けていたジグゾーパズルの最後のピースがベッドの下から出てきたような、そんな喜びがあった。

凧子はうれしさに、熟睡している貫太を叩き起こした。

「あの通りの名前を、いま思い出したわ」
興奮した声で貫太に伝えると、凧子はポスターを指さした。

寝ぼけながらも、ポスターに視線を投げた貫太は「なんだ、百獣の王だったのか」とつまらなそうに言ったかと思うと、再び眠りに落ちていった。凧子はなぜかうれしくて、いつまでも頬を緩ませていた。こんな些細なことを言い合える相手がいることこそが、しあわせなのかもしれない。そんなことを思いながら。

凜子は穏やかな表情で眠る貫太を静かな気持ちで見つめていたが、自分もひと眠りしようとしてそつと目を閉じた。

目の裏には、まだ見たことのない瀬戸の夕風が浮かんだ。そして、瞼の奥にクローバーを映したそうと、凜子はさらに固く目を閉じる。

やっと浮かびあがった、ちいさく頼りないクローバーは、やはりまだ三つ葉だった。

(完)

(以上8月8日放送分)